

## 『日展に考える』

こういうとばかにハイカラがつて古典的なものを一掃せよと提唱しているように聞えるかも知れないが、誤解されては困る。私もこの漢学調のものにうざまって、あるいは記紀以後の日本古典の中に涎を流しているひとり、本当はこんな新しうな言説は柄にないひとりかも知れないが、閉じこもって蓋をして独りよがりをしてはいけなさと常に自分にもいつて聞かせていることを書いてるのである。しかしこれとてもやはり古典的裏づけの足りないものは、あまりにも知れきったことである。

私はせめて自分で出来ないまでも、こういったような作品がそろそろ出てほしいことを希望し、またそれに近いものを見いだした時には、親しい温い眼で見えて書道芸術の伸展に対する祈りを捧げてきているつもりである。

今年の毎日展に出品された一千点からの作品の中に前述のような意図に通う作品の二つを見いだしたことは実にうれしかった。そのひとつは高松戊申君のもので「婦」という字を象徴的に煮つめたもので、しかも立派に古典に立脚したものだった。しかるにある人々はこれを不真面目な作品だといって、その芸術的意図など顧みてもくれなかった。この時は私も憤りに近い冒瀆を感じ、またそれらの人々の貧困なる鑑賞の眼をあわれまざるを得なかった。

もうひとつは飯島春敬君のゲーテの詩を書いた額だった。これも表現形式については私もかなり異論はあるが、とにかく陳腐を抜け出そうとして努力された極めて近代性を持った作品だったが、これもIという人の批判だったかでは出さない方が良いものだったとかという冷やかなり言葉を浴びていた。こんな状態では書道の現代人にうったえるものなどは試みにもなかなかな作れるものではない。もっともいつの時代でも新たな開拓に進むものには冷酷な待遇はつきものではあるけれど――。

日展というような高度の文化層にうったえ得る舞台を得た書壇

にとつて、今後に切望するものはいろいろあるが、以上の放言もあの会場にして考えさせられたことのひとつなのである。

〔書道文化〕、昭和二十五年八月

〔筆問雑記〕中村素堂随筆集(昭和六十三年刊より転載)。



わが姉妹鳥たちよ(聖書) —昭和41年—